

読者の声

訪問看護の魅力と可能性を再考！

藤井かし子

愛知県・訪問看護ステーション太陽

本

誌2014年11月号の特集「これが私の訪問看護だ。」のベテラン訪問看護師たちの実践の経験を読ませていただき、あらためて訪問看護の魅力と可能性について考えることができました。

利用者が生活の場でその人らしく生きていけるように支援するには、訪問看護師の力量が大きく関わっていることも学ぶことができました。

私は2014年3月まで、大学病院の病棟で常勤の看護師として勤務していました。病院での勤務中、多くの患者さんから「やっぱり家がいい」「早く家に帰りたい」という訴えを多く聞いていました。そのような訴えを聞くうちに、病院勤務中に在宅での看護に興味を持ち始めました。

そして、病院勤務中から、在宅での療養者の生活を知るために介護支援専門員の資格を取り、また、在宅で多いといわれる脳血管疾患の患者さんを理解するために、脳外科に希望をして配属してもらうなどして、在宅でいざ働くことを考えて準備をしました。

その後、2014年5月から訪問看護師になり、約14か月が経ちました。その間、病院の看護師と訪問看護師の違い、病院と在宅での患者さんとの関わり方の違い、大きい組織と小さい組織で働くことの違いについてさまざまな戸惑いと不安、疑問を乗り越えてきました。

そして今、ようやく幅が広く、奥深い訪問看護という仕事を何となく

理解できるようになりました。

しかしながら、病院ではわからなかった高齢者や独居高齢者の生活ぶりや、家族や療養者の人生の歴史や生活のパターンによる多様性には、いまだに毎日驚くことばかりです。

そこで、以下に私が発見した訪問看護という仕事について述べてみます。

①医療の視点による看護から

生活の視点による看護へのシフト

訪問看護ステーションで働き始める前は、病院で行なっている医療行為、つまり医師の指示のもとで行なっている点滴や採血やドレーンの管理などを在宅で、病院と同じように提供することが訪問看護の仕事だと思っていました。

しかし、訪問看護師になり、在宅ではそれ以上のことを考えていかなければならないことを実感しました。訪問看護師には、療養者を生活の視点から総合的にみて、その人がその人らしく生きている場所で、病気と闘いながら、その人らしく生きていくことを支える役割があることや、介護する家族とも十分な関わりをもって相談ののっていくカウンセラーのような役割があることも知ることができました。

②探偵のようにふるまう訪問看護師

訪問看護師になってから、白十字訪問看護ステーションの秋山正子さんが紹介されたNHKの番組『プロフェッショナル 仕事の流儀』のDVDを鑑賞することができました。そのなかで、秋山さんがある事例を紹介して、脳科学者の茂木さんに「訪問看護師は名探偵のようです」と話されていたのが印象的でした。

訪問看護師は、特別指示書が出ていなければ訪問したとしても週に



1～2回です。その限られた回数の訪問で、最大限の知恵と想像力を働かせて、療養者が次の訪問までのような暮らしをして、どう安心して暮らせるかを考えて援助をする役割があることを発見しました。

③訪問看護師は人の話を聞くのが上手

他の訪問看護師と同行してよく感じたことは、訪問看護師は高いコミュニケーションスキルをもっているということです。療養者や家族のどんな愚痴や文句にも深くうなずき、同意しながら上手に傾聴する技術には毎回驚きました。訪問看護師のコミュニケーション能力が療養者の大きな支えになっていることを発見しました。



上記以外にも発見したことは、まだまだたくさんあります。私はまだ未熟な訪問看護師ですが、日々の知識と技術を実践的に学び、経験をつみながら、在宅療養者と家族がその人らしく生き、後悔しないような人生を歩めるような援助をしていきたいと思います。